



当事者からすべてが始まった

私は高校を卒業しても、自分を必要としてくれるところがなくて、社会から必要とされていないと感じていました。しかし教会の幼稚園では、そんな自分に子どもたちが寄ってきてくれて「一緒に遊ぼう」と言ってくれました。それはまさに、イエス様がしてくれたことでした。イエス様が小さな子どもを歓迎したように、あるいは社会から排除されているさまざまな人を受け入れたような、イエス様の姿を感じたのです。私は「これはすばらしい働きだな」と思いました。そして、福祉と牧師の働きを志したのです。

教会を始めると、たくさんの方が集まってきます。少し打ち解けると、そこで家庭の事情を分かち合ってくれるようになります。介護している人がいるとか、精神疾患を抱えた兄弟がいるとか、さまざまな困難を抱えた人がいて、そのような人たちが逃れる場所がなく、この社会にも居場所がないのです。ある時、私のところに、障害を持った方の親御さんが来られました。「この社会の中で、もし

佐々木 炎

Hohonoo Sasaki



中原キリスト教会牧師。NPO 法人ホッとスペース中原代表。静岡県生まれ。聖隷学園福祉医療ヘルパー学園、聖契神学校、日本社会事業学校専修科卒業。特別養護老人ホーム職員、プライベート介護に携わった後、1998 年、中原キリスト教会開拓と同時に、地域福祉活動「ホッとスペース中原」を始める。介護福祉士、主任介護支援専門員の資格を持つ。社会福祉法人牧ノ原やまばと学園理事。著書に『人は命だけでは生きられない』（いのちのことば社）、『どん底から見える希望の光』（キリスト新聞社）など。

私がいなくなったら、誰がこの子を支援してくれるのか。それを考えた時に本当に誰もいない。この子を残しては私は死んでいけない」と言われるのです。私は神様の使者から問いかけられたように思いました。このように、「何とかならないのか」という当事者家族の声から、私たちの教会のあり方が広がっていきました。障害を持っておられる方や認知症の方、介護が必要な方、刑務所から戻って来られる方など、社会に逃れのない方が一緒に過ごす場所、それが私たちの教会です。



現実社会と教会の役割

現在の教会が十分に社会へ応えられていない理由の一つは、実践神学が弱いことにあります。私は聖書を読む時、最初に現実社会を見ます。現代社会は自己責任、競争、生産性、自立を強く求めます。その結果、多くの人が孤立し、自分の存在価値を見失っています。しかしイエス様はどうかといえば、自己責任ではなく、共に生きてくださるお方です。教会は傷つき、孤立した人のシェルターとして、逃れの場所として存在し、人間の尊厳を回復する場所でなければなりません。

なぜそもそも、他者と共に生きなければならないのでしょうか。

1. 私たち一人一人が神の似姿に造られているから
2. 父なる神に愛されている、神の子だから
3. イエス・キリストが十字架の上で身代わりに死なれるほど、すべての人には価値があるから
4. すべての人が神の御国を受け継ぐ者であるから

この4つの理由が根幹となって、神にある尊厳を取り戻すことが働きとして求められています。それを宣教と呼ぶのではないかと私

は捉えています。

相手の尊厳を認め、他者を歓迎するということは、言葉だけでなく、表情や態度、仕草などを通して、「あなたには神にある尊さがあるのだ」と伝えることで、今はそれが教会にとっても問われていると思います。

教会の3つの働き

教会には大きく分けて3つの働きがあると言われています。ケリユグマ（福音宣教）、ディアコニア（愛の実践）、コイノニア（共同体）の3つです。もちろん宣教は大事ですが、この三角形がうまく機能していないように見受けられます。聖書はもちろん大事です。しかしレスリー・ニュービギンは「イエスは本を書いたのではなく、共同体を形成された」と言いました。私はそこに意味があると思います。教会とは、人と人との間に神の愛、神の存在を分かち合う共同体だからです。



語るよりも聞くこと

ですから、教会はまず語るよりも、聞くべきであると思います。私たちはどうしても、救いという主張や説明を持っていて、それに当てはめて語ろうとしてしまいます。しかし、語る前に聞くことが大事です。それはもちろん、神に聞くとともに、痛む人から聞くということです。

逃れのある場を作るためには、私たちの中にある、逃れのある場を設けることを妨げているさまざまなものをメタノイア（価値の転換）していかなければなりません。例えば、私たちは無意識のうちに、国籍、障害、犯罪歴、家族構成、性別、年齢などで人を区別し、カテゴライズしてしまいます。ラベルをつけて、知らず知らずのうちに教会



から遠ざけているのです。教会は「ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない」という福音に立ち返らなければなりません。

哲学者のデルタの言葉に、このような有名な言葉があります。「真の歓待とは予期しない他者を迎え迎え入れることである」。私たちは似たような人、好きな人で集まっていることが一番楽です。それは教会も同じです。しかし、本当に歓待するホスピタリティとは、他者を受け入れることであり、理解できない、異質だからこそ受け入れていかなければなりません。

教会というのは、地域の中で共に生きているのですから、顔を合わせたら挨拶をし、疲れているように見えたら「疲れてない？」と声をかけたり、うれしそうなら「何かうれしいことがあったの？」と声をかけたりして、応答していく関係づくりが大切です。なぜそうするかと言えば、神様がまず私たちを歓待してくれたからです。

「こういうわけで、キリストもわたしたちを受けいれて下さったように、あなたがたも互に受けいれて、神の栄光をあらわすべきである」(ロマ 15:7)

出発点はやはり、イエス・キリストが私たちを受け入れてくれているということであり、私たちも同じようにしていくことだと思います。

ワンチームと共感

もちろん教会だけですべてを抱えることはできません。専門性は必要です。今は専門職も互いに連携して、例えば介護職であれば、看護、相談期間、医療などが顔の見える関係でつながっていくことが大事だと教えられます。

教会の大事にしているものは、寛容さであるとか。一人一人を誰も差別しないで受け入れていくという「逃れの町」です。その場所をどうやったら作っていけるのか、より育めるのかというのは、専門家と一緒に伴奏していく必要があると思うのです。医療、福祉、行政、地域住民と連携しながら、それぞれの専門性を生かしてワンチームで支えていくことが大切です。主義、主張が違っていても、目的を合わせるのです。

先日、児童養護施設から出てきたやんちゃな子どもが来ました。「素敵な茶髪だね」と言うと「これ、金髪だよ」って言いながら話を聞きつつ、「児童養護施設に緊急に入った理由、何かあるの?」と尋ねたら、「実はさ、お母さんがね、包丁を取り出してきて、ぼくの足を刺したんだ」って足の太ももを見せながら話してくれるのです。それを聞くと、ぐっと来るじゃないですか。教会は痛みとか苦しみに敏感であるべきで、そこを見過ごしてはいけないと思います。

教会はどうしても、上から救ってあげようとする、下からすくいあげようとしてしまいます。しかしイエス様はそうやって救うのかと言えば、横にいてくださるのです。それぞれ背景が違うわけですから、一方的にラベルを貼ってしまうのではなく、一人一人の物語に耳を傾け、個別にかかわって、「大事だよ」と伝えたり、「それを言われたらぼくは悲しいな」と伝えたりしたらいいと思います。そうすると、



相手もこちらのことを考える気づきが与えられます。そのように互いに受け入れ合い、思い遣ったり気にかけてたりして、次第に変わっていくのです。

しかし私たちも人間ですから、相性もあるし、好き嫌いも感情もあります。ですから、一人で受け入れるのではなく、たくさんの人たちで支え合っていくことが大切だと思います。また、教会の一人一人の距離感も大切です。私たちはどうしても、仲良くなればなるほど愛し合うことができると思います。しかし実はそうではありません。距離が近すぎると、かえって悩みを打ち明けられないことはたくさんあります。適度な距離感にあるからこそ、打ち明けられるということがあるのです。

教会という「井戸」

私が教会を思い描く時、いつも「井戸」と「市場」のイメージがあります。「市井の人」という言葉がありますが、市井というのは「市＝市場」「井＝井戸」という意味から来た言葉です。昔、人々は井戸に集まり、水を飲み、食べ、語り、喜びや悲しみを分かち合いました。集まったその場所から市場や共同体が生まれ、広場ができてくるわけです。教会とはまさにこの井戸であり市場であって、渴いた人や一息つきたい人が集まり、語り合う場だと思います。井戸に様々な背景の人が集まってきて、いかに語り合えるかがとても大切です。互いに正しさで裁き合うのではなく、イエス様が井戸のかたわらでサマリアの女性に語りかけたように迎え入れる、そのような歓迎の仕方で井戸を作っていくことが大切ではないでしょうか。

海外の事例

例えば海外では、北欧やドイツ、韓国などでは、「ディアコニア」を大事にしています。教会が地域福祉やカフェ、学びの場を通して共同体を築く取り組みが進



んでいます。韓国でも「ここは教会ではない」という雰囲気、若者が集まるカフェであったり、ジムなどがあって、いろいろな社会的機能を持った場を教会が作っています。北欧でも人が集まる場所を作ります。例えば図書館がそのような場所になって、そこでセミナーやカルチャースクールがあって、いろいろな人が教えられ、学ぶのです。そのように、福祉はただケアをするところではなく、互いに教えられ、共に成長する営みです。当事者から学ぶことで、地域も教会も変えられていきます。

私自身も、認知症の方と障害児が同じ空間で過ごす中で、常識が覆される場面を何度も見てきました。私たちが「走ってはいけない」と考える場面でも、車イスの高齢者は「元気に走れることはすばらしい」と喜びます。弱さの中にこそ、新しい視点が与えられるのです。

歓迎を手渡していく

ホスピタリティとは、自分が犠牲になって尽くすことではありません。神から受けた歓迎を、他者へ手渡していくことです。できない自分を認めながら、日々振り返り、また神に立ち返る。その繰り返しの中で、教会は少しずつ「逃れの間」となっていくのだと思います。「かわいそう」「助けてあげよう」という意識は、まだまだホスピタリティとはなっていないのです。

これは佐々木炎先生にインタビューした内容をまとめたものです。

佐々木 炎先生の著書

「どん底から見える希望の光」

(キリスト新聞社) 佐々木 炎 著

介護に悩む人へ。人生に迷う人へ。

そして、「生きる意味」を問い続けるすべての人へ。

牧師であり、福祉実践者でもある著者は、教会を拠点に、地域福祉の最前線を歩み続けてきた。出会ってきたのは、要介護の高齢者、障がいのある人、精神疾患と向き合う人、前科を抱えて生き直そうとする人、全財産が数百円しかない人、身寄りのない人、孤独の中で暮らす人など。社会から見えにくくなった人々と共に歩み、その人生に寄り添う中で著者自身が教えられたのは、「人は何によって生きるのか」という問いへの答えだった。福祉と信仰という二つの現場で紡がれた、涙と希望の29の実話。

どん底だからこそ見える光がある。人はどんな人生からでも、もう一度立ち上がることをできる。

<https://www.kirishin.com/book/46350/> 教文館などで扱っています

